

# 子どもが学びをつなぐ特別活動

## 特別活動

中別府 靖



### 研究テーマについて

#### 1 特別活動における「深い学び」とは

前年度までの3年間、各教科等研究部は、各教科等の特質に応じた学びの本質に迫る授業を創造、展開するために「深い学び」のある授業について追究してきた。本研究が、前研究という土台の基に成立していることを考えると、特別活動における「深い学び」とは何なのか、明らかにしておく必要がある。

特別活動研究部では、特別活動における「深い学び」を以下のように捉えている。

「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の3つの視点について、基本的な学習過程を繰り返すなかで、各教科等の特質に応じた見方・考え方を総合的に働かせ、各教科等で学んだ知識や技能等を、集団及び自己の問題の解決のために活用していくこと

特別活動は、課題を見いだし解決に向けて取り組む実践的な学習であるということや、各教科等で学んだことを実際の生活において総合的に活用して実践するというように、『『実践』をとおして学ぶこと』を大きな特質としている。この「実践」については、課題の設定からふりかえりまでの一連の活動として広く捉えることが大切であるとされている。そのため、平成29年告示の学習指導要領においては、特別活動の全ての内容について、基本的な学習過程が示され、課題の設定からふりかえりまでの一連の活動をより一層充実させることがめざされた。

子どもが課題を自分事として認識し、その解決のために話し合い、話し合ったことを基に実践し、ふりかえる。その基本的な学習過程が保障されてこそ、子どもはそのなかで主体的に各教科等の特質に応じた見方・考え方を総合的に働かせ、各教科等で学んだ知識や技能等を活用しながら、仲間と協働して課題解決に向かおうとする。すなわち、各教科等の学び、自分と仲間の学びをつなげ、主体的に社会参画や自己実現に向かおうとするのである。

#### 2 学びをつなぐ姿

- 各教科等の学習を、活動や実践をとおすことによって深めている姿
- 活動や実践をふりかえり、新たな課題や目標を見いだす姿
- 活動や実践をとおして学んだことを、他の活動や実践、各教科等の学習に生かす姿
- 自分と仲間、仲間同士の思いや考えをつなぎながら話し合う姿
- 活動や実践をとおして学んだことや見いだした自分や仲間のよさや可能性を、よりよい学級、学校での生活づくりや、よりよい人間関係形成、自己実現へつなげる姿

特別活動においては、上記のように、各教科等の学びや、自分と仲間の学びをつなげ、主体的に社会に参画したり、自己実現に向かったりできる子どもを育成していきたい。このような姿を引き出すべく、本年度は次の2つの内容について研究を行っていく。

## 研究内容

- 1 主体的に社会に参画したり、自己実現に向かったりできるようにするための手立て
  - (1) 課題を自分事として捉えさせるための手立て
  - (2) 事後の活動の充実

## 研究内容の基本的な考え方

- 1 主体的に社会に参画したり、自己実現に向かったりできるようにするための手立て
  - (1) 課題を自分事として捉えさせるための手立て

子どもが主体的に社会に参画したり、自己実現に向かったりするためには、まず子どもが目の前の課題を自分事として切実に受け止めることが必要となる。それが、各教科等の見方・考え方を総合的に働かせたり、各教科等で学んだ知識や技能等を活用したりしながら、よりよい合意形成や意思決定を行ったりすることにつながっていくはずである。

子どもが課題を自分事として捉えることができるようにするために、学級活動(1)においては、学級会における議題を日常生活と関連のあるものから選定したり、学級で議題のなかから必要感の高いものを子どもとともに順序付けて決定したりするなどの手立てについて研究していく。学級活動(2)(3)においては、題材を提示する際に、資料の比較をさせたり、アンケート等から分かることを様々な視点で読み取らせたりするなどの手立てについて研究していく。

### (2) 事後の活動の充実

学級活動においては、本時における話し合い活動や授業そのものが目的となり、事後の活動が子どもに委ねられ、おろそかになってしまうことも少なくない。子どもが主体的に社会参画や自己実現に向かうためにも、課題設定から、決めたことの実践やその後のふりかえりといった事後の活動までを含む一連の活動を確実に保障することが必要になる。

事後の活動を充実させるために、実践の方法（実践内容の焦点化、家庭との連携の仕方等）、見届け方、ふりかえりの方法（教師と子ども全体とで毎日口頭でふりかえりを行うのが望ましいのか、学習プリント等を用いて子どもの目に見える形でふりかえるのが望ましいのか等）について研究していく。

## 研究の実際

- 1 主体的に社会に参画したり、自己実現に向かったりできるようにするための手立て
  - (1) 課題を自分事として捉えさせるための手立て

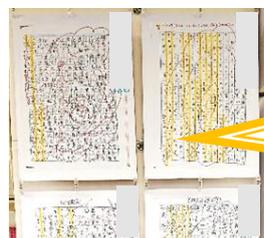
「話し合いにおいて合意したことや、意思決定したことを、よりよい学級、学校での生活づくりや自己実現へつなげる姿」が特別活動における学びをつなぐ姿の1つであると先に述べた。子どもが、合意したことや意思決定したことを、学級や学校での生活や自己実現に生かしたいと思うには、課題（学級会の議題や学習課題）が自分にとって身近で、必要感のあるものになっていなくてはならない。そうなれば必ず子どもは、各教科等の見方・考え方を総合的に働かせたり、各教科等で学んだ知識や技能等を活用したりしながら、よりよい合意形成や意思決定をめざすはずである。そこで、課題を子どもにとって身近で必要感があるもの（総じて「自分事」という言葉にまとめる）にしていくための手立てについて検証した。

### ① 第3学年 学級活動(1)「運動会のスローガンを話し合おう」における実践

代表委員会から提案された運動会のスローガンについての話し合いを行った。議題を一人一人が自分事として考えることができるようにするために以下のような手立てを講じた。

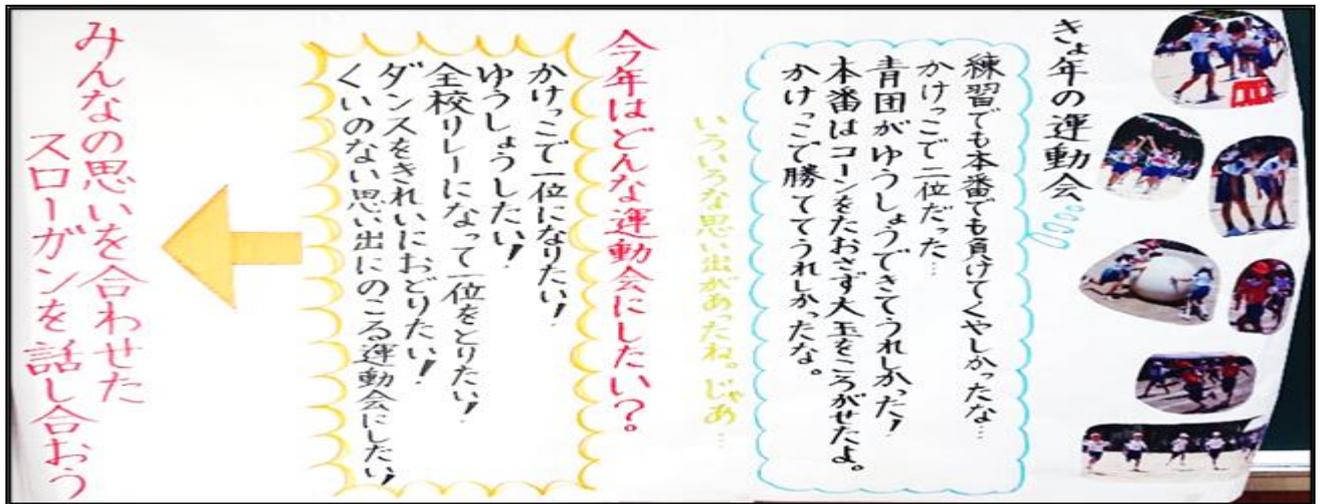
#### 手立て

学級会前に、昨年度の運動会の様子をスライドショーで見せ、思い出を想起させる。そのうえで、「今年はどうな運動会にしたいか。」と問いかけることで、今年度の運動会に向けて一人一人が思いをもって話し合いに臨むことができるようにする。子どもの思いの書かれた日記や、スライドで用いた写真を教室に常掲しておくことで、さらに運動会に対する思いを高めることができるようにする。



ぼくは、みんなが負けても勝っても悔いはないというという思いをこめたアイデアを出したいです。運動会、どんなスローガンになるか楽しみです。今でもドキドキしています。

【スライドショー鑑賞後の子どもの日記を掲示している様子】



【実際の掲示物】

子どもの姿



〇〇さんと□□さんの思いは似ているから合わせられそうだよ。

みんなの考えをうまく合わせられないかな。



提案理由の「みんなが一致団結」という思いに合っているのはあれじゃないかな。

考察

思いの持たせ方の工夫や、掲示物を活用して思いを持続させるための工夫等の手立てにより、議題に対し、真剣に考え話し合う子どもの姿は見られたものの、一人一人が切実な課題として受け止めるまでには至らなかった。それはそもそも「運動会のスローガン」という代表委員会から提案された議題が、3年生の子どもにとって切実感のあるものではなかったということが原因として考えられる。学級活動(1)においては、発達の段階や学級の実態に応じて、子どもが自分事として切実に話し合いたくなる議題とは何なのか、教師がそれを見極める力をもつ必要がある。

② 第3学年 学級活動(2)「食べ物のひみつを知ろう」における実践

3大栄養素をバランスよく摂取することの大切さについて考える題材である。子どもの食べ物の栄養に対する疑問を引き出し、話し合う必要性をもたせるべく、導入において以下のような手立てを講じた。

手立て

事前に「好きな食べ物」「嫌いな食べ物」についてそれぞれアンケートを取り、本時でその結果をランキング形式で発表する。その後、「好きなものを毎日食べていいと言われたらどう?」と問うことで、「体に悪い。」等の指摘を引き出し、「好きなものを食べ続けると本当に体に悪いのだろうか?」という子どもの疑問を引き出すことができるようにする。

子どもの姿

	すき	きらい
1位	チョコレート	ゴーヤ
2位	魚	ピーマン
3位	肉	ナス
4位	すし	トマト
5位	白ごはん	だいず

【実際のランキング】

T : みんなの好きな食べ物を毎日食べ続けていいよと言われたらどう?  
 C1 : やったー!  
 C2 : だめだよ! 絶対体に悪いよ!  
 C3 : 先生、それ本当?  
 T : C3さんどういうこと?  
 C3 : だって、好きな食べ物にも栄養は入っているはずでしょう? だから体に悪いとは限らないんじゃない?  
 C : たしかに。  
 C : え〜。(※子ども同士の考えがずれる。)  
 T : C3さんの意見に対してみんなの考えが分かれているみたいだね。では、そこについて考えてみようか。  
 ⋮

【実際の子どもと教師のやりとり】

## 考察

本時で行った発問は、子どもの考えを「ずらす」ことをねらったものであった。教師としては「体に悪い」「別によい」の二択でのずれを予想していたが、C3の発言により、「好きなものだけを食べ続けると本当に栄養は摂れないのか？」という、より本質的な部分でのずれが起こったと考えられる。

子どもの考えが「ずれた」ことにより、「考えたい」「明らかにしたい」という気持ちを引き出すことが可能になった。子ども同士の考えにずれを生むというのは他教科における問いをもたせる手立てとして用いられることがあるが、それが学級活動において、課題を自分事とするうえでも効果的であることが分かった。本時のなかで、自分事として話し合うことができた子どもたちは、給食の時間にいつもよりも多く苦手なものを口にしたり、家庭でも意識的に野菜を摂取したりするなど、本時の学びを自身の生活につなげている姿が見られた。

## (2) 事後の活動の充実

### ① 第3学年 学級活動(2)「あなたの手、本当にきれい？」における実践

手洗いにに関する題材である。このような生活習慣にかかる内容は、その必要性を認識するだけでなく、実際の生活のなかで確実に実践していくことが重要である。そのために以下のような手立てを講じた。

#### 手立て

帰りの会を利用し、その日の手洗いの様子を毎日ふりかえらせることで、子どもの意識の持続を図る。ふりかえりは、実践カードにめあてを立てさせ、赤（未達成）、黄（まあまあ）、緑（達成）のシールを貼らせ、達成度をふりかえらせる。「1週間緑のシールをめざそう。」と伝えることで、意欲をもたせることができるようにする。さらに、水道には、洗い残しの多い部分についてのポスターを掲示することで、日常的に意識して手洗いを行うことができるようにする。

#### 子どもの姿

緑（達成）に近づくことができるように、めあてを基に自分の実践を見直しながら取り組む姿が見られた。

正しく手を洗おう						正しく手を洗おう					
自分のめあて ゆひ先せけひのすきまなど一番よこれせらい所を せけいできれいにあらう。											
3日(木)	4日(金)	7日(月)	8日(火)	9日(水)	10日(木)	3日(木)	4日(金)	7日(月)	8日(火)	9日(水)	10日(木)
緑	緑	緑	緑	緑	緑	赤	黄	緑	緑	黄	緑
1週間をふりかえって めあてどおりにできている。											
1週間をふりかえって はじめの目標を達成できなかったけれど、かかどきで うに近づけたから、これからいっしょにがんばろう。											

【子どもの実践カード】

## 考察

シールを用いることで短時間かつ簡単なふりかえりが可能となり、毎日継続してふりかえりを行うことができ、子どもの意識を持続させることができた。また、シールによるふりかえりは、子どもにとっても視覚的に成果が分かりやすく、達成できた喜びや、次への意欲をもたせるためにも有効であったと考えられる。実践カードを用いたふりかえりは、子どもにめあてを意識させ、実践を充実させるために効果的であった。しかし、生活のなかで定着させていくにはさらなる工夫が必要である。

## 今年度の研究のまとめ

### 1 主体的に社会に参画したり、自己実現に向かったりできるようにするための手立て

#### (1) 課題を自分事として捉えさせるための手立て

- 課題に対する子どもの認識にずれを生み、一人一人に疑問をもたせることは、課題を自分事とするうえで効果がある。自分事として考えることで、自ずとよりよい実践へつなげていこうとすることができる。
- 子どもの発達の段階に合っているかどうかを教師が正確に見極めて課題（議題）を設定することが、子どもが自分事として考えるうえで大切である。

#### (2) 事後の活動の充実

- 実践カード等を用いたふりかえりは、子どもにめあてを意識させ、活動を充実させるには効果的である。短時間でもふりかえりを継続していくことで子どものよりよい実践へとつないでいくことができる。
- 実践カード等を用いたふりかえりは、その効果がカード等を用いている期間に限られてしまうことも少なくない。教師が意識的に子どもの生活や学習等とつないでいくことで、よりよい実践や次の課題発見等が期待できる。

参考文献：特別活動で、日本の教育が変わる！ 杉田洋・稲垣孝章 小学館 2020

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料小学校特別活動

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター 東洋館出版社 2020